

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目

Lost and Emerging Manhoods in Melville's Later Novels
(メルヴィルの後期小説で描かれる男らしさの行方)

氏 名

林 姿穂

論 文 内 容 の 要 旨

ルネサンス期を代表するアメリカ人作家の一人であるハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) の後期小説には、封建的な家父長制に基づく男らしさ (Manhood) とは別の多種多様な男らしさが繰り返し描かれている。これまで何人かの批評家は男性主人公たちの父権の弱体化のネガティブな側面を指摘してきたが、必ずしもそれをネガティブなものとして解釈するのではなく、むしろ 19 世紀に新しく出現した男らしさの形だと定義づけることができるのではないかと考える。

そこで本論では、メルヴィルの作品群の中でも、主に 1850 年以降に書かれたものを取り上げ、その中で描かれる、家族関係や、男女の労働領域の問題、さらには、奴隷船や戦艦といった閉じられた男性社会でのリーダーシップの問題に焦点を絞って、男らしさの定義の多様性について考察する。

これらの作品が描かれた 19 世紀の中頃は、これまで通用した男らしさの定義が揺らいだ時代であったと言える。その揺らぎの要因には、資本主義の発展による女性の家庭内での役割の変化や、ホモセクシュアリティに対する社会的反応の変化、また、奴隷制の崩壊などが挙げられる。これらの社会背景やジェンダーの問題を考慮に入れながら、メルヴィルの作品世界の新たな解釈の可能性と、当時の男らしさの多様性を提示することが本論の目的である。

19 世紀中頃に見られるアメリカ人男性の特徴について、様々な批評家はその定義づけを試みているが、彼らは共通して、男らしさは、かつてのように、単なる不動産や財産の所有、または父親的な厳格さによって確立されるわけではないと指摘する。特に商業主義の中で生きる男性労働者は精神的に追い詰められて自己破滅するようになってはならなかった。健全な精神状態を保てるかどうか、男らしさの確立につながると指摘する批評家もいる。例えば、E. アンソニー・ロタンドは、当時の男性は情熱に満ち溢れているだけでなく、上手に息抜きをする術が求められたと指摘する。本論で取り上げるフィクションの中の男性主人公たちの中には、ピエールのように商

業主義に抗えず自己破滅する者もいれば、自らの父権の弱体化を直視せず、むしろ空想やかつての栄光にふける者もいる。また、資本主義社会の外側、即ち戦艦や奴隷船といった閉じられた男社会の中で男らしさを確立する登場人物もいれば、下級船員の予期せぬ行動によって権力を奪われる者もいる。

第1章では、メルヴィルの数少ない家庭小説の中の『ピエール、またはその曖昧性』(*Pierre; or, The Ambiguities*, 1852)と「私とわたしの煙突」(“I and My Chimney,” 1856)を取り上げ、失われた男らしさと新たに出現した男らしさを、フロイトのエディプスコンプレックスやベルクソンの笑いの理論と関連付けながら確認していく。

『ピエール、またはその曖昧性』では、ピエールが男らしさの確立に失敗し、一家の大黒柱として家計を支えることもできず自己破滅するプロセスが描かれる。自己破滅の要因は、理想とする父親像を獲得できないことや、母親や義姉の抑圧によるものである。「私とわたしの煙突」では、煙突の取り壊しをめぐって、夫婦が対立する。作品中の煙突を男根の象徴と見なすならば、煙突を保持し続けたい語り手は、常に去勢不安にさらされていることになる。こういった精神状態は一般的に少年期から成人男性への成長のプロセスとして男性が経験するものであるとフロイトは論じるが、語り手は自分が未成熟な少年ではなく、年老いた老人であるかのように振る舞う。語り手は自らの去勢不安を読者にとっての笑いに変えてしまう。語り手は家族と対立しつつも、家族の抑圧に耐えている自分を客観的に見つめる。そして語り手はその自分の置かれた現状を笑い飛ばすほどの精神的強さを自慢することで、自らの男らしさを主張している。

第2章では短編小説「独身者たちの楽園と乙女たちの地獄」(“The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids,” 1855)と「歩廊」(“The Piazza,” 1856)を取り上げながら、山々に隔離された女性たちがその地を訪れる男性たちにどのような影響を与えるかを考察する。両作品で描かれる自然風景は、荒れ果てた山の光景や死を連想させるような工場、廃墟などであり、エドモンド・バークの提唱する崇高美の概念に当てはまる。しかし、メルヴィルの作品世界では、崇高な自然風景の美しさといった概念は完全に損なわれ、荒れ果てた自然は単に不毛さや死を暗示するものでしかない。

「独身者たちの楽園と乙女たちの地獄」では女性労働者たちの病、即ち工場で蔓延している結核が、自然風景の描写を使って暗示される。確立された工場システムに誇りを持つ工場監督者は女性の病や苦悩に気付くことはない。監督者の無頓着さによって女性の労働力が今にも失われそうになっているが、それは工場システム全体の機能が停止することを意味している。また同作品では独身生活を謳歌する男性の法律家たちの集団が対照的に描かれているが、彼らは女性労働者とは地理的に離れたところに居を構えているため、苦悩する女性の存在を知る由もない。この作品には独身男性の無頓着さと名ばかりの父権の存在が色濃く描かれている。

一方「歩廊」の主人公も、山中で崇高美の概念に当てはまる風景を何度も目にしますが、その度に、その景色が芸術的価値を持ったものではなく、単なる荒地に過ぎないことを認識する。隔離された山中の廃墟で孤独な独身生活を送っているマリアンナと主人公との出会いは、主人公が絵画的空想の世界に浸ることをあきらめ、山から離れて現実を直視するきっかけを与える。よってメルヴィルが「歩廊」で描いた山中へ旅は 18 世紀末に流行したヨーロッパ的「ピクチャレスク・トラベル」とは全く異なっている。両作品の共通点は、ロマンスや美は存在せず、不毛な独身生活と男女の隔たりが自然の景観でもって表現されていることである。女性たちを山に隔離したまま不毛な独身生活に安住を求める男性の存在や、男女の地理的領域の隔離によって子孫を残すことのない不毛さが両作品で描かれており、それは当時の社会問題を反映していると言えるだろう。

第 3 章では、「ベニトセレノ」(“Benito Cereno,” 1855) と『水夫ビリーバッド』(*Billy Budd, Sailor*, 1891) を取り上げ、閉じられた男性社会の中でのリーダーシップについて論じていく。

「ベニトセレノ」においては、奴隷のバボが船長ドン・ベニトに向かって繰り返し“follow your leader”と言いながら、船長の友人の死体の肉を剥いだ、骨だけの船主像を指さす。本作品で繰り返される、“follow your leader”の多義的な意味を考察するとともに、マニフェスト・デスティニーの理論と関連付けながら、揺るがないリーダーシップを発揮していると感じて疑わないアメリカ人船長、デラノ船長の無頓着さについても論じていく。デラノ船長の無頓着さと判断力のなさは『水夫ビリーバッド』のヴィア船長にも共通している。

『水夫ビリーバッド』で描かれる、上官による性的とも思われる少年への挑発行為は、作品の時代背景である 1700 年代後半に現実のイギリス戦艦でも頻繁に見られた。戦艦内の同性愛は船内の秩序を乱すものとして忌み嫌われ、それが発覚した場合には、挑発した者が死刑に処されることもあったと言われている。その一方で、明らかな証拠がなく、同性愛なのかどうか疑わしい場合は、処分が見送られることもあり、それはヴィア船長の一連の発言や行動と類似している。ここでは、ヴィア船長の判断の妥当性を検討しながら、船長の中心的権力が、どのようなプロセスを経て物語の結末でビリーに移行したのかを論じていく。

以上のように、男らしさの定義は社会的変化やそれに伴う価値観の変化とともに揺らぎ、白人男性たちによる従来の権力行使はもはや通用しなくなっていることがメルヴィルの作品に反映されている。代わりに、今まで権力を持たなかった女性や奴隷が男性たちに影響を与え、労働システムや家族の結束をコントロールするようになった。メルヴィルは煙突を伴う家の構造や、芸術作品、美の概念や、戦艦での同性愛など、様々なテーマを取り上げ、多様な男らしさのあり方を描いたと言えるだろう。